

『「交渉」に生徒が関心を持った理由と受験のための勉強との相違について』

東京都立蒲田高等学校 3学年担任(国語科)
高橋 航慈

本校は小・中学校で十分能力を発揮できなかった生徒のやる気を育て、頑張りを励まし、応援しながら、勉強や学校行事・部活動などを通して学校生活を充実させることを目的としたエンカレッジスクールです。中・高等学校交渉コンペティションに参加させていただくのは今回で2回目となりますが、その中で私が感じた生徒が関心を持った理由と受験のための勉強との相違について、浅学ではありますがお話しさせていただきます。

生徒が交渉に関心を持った理由として、同年代の中学生・高校生を相手に行うものであるということが大きかったと考えています。受験のための勉強は、筆記や面接といった受験形態にかかわらず基本的に対大人の勉強になることが多いです。出題・採点を行うのは大人で、答えるのは生徒、という図式です。大人とのやり取りを通じて、評価されていくのが受験のための勉強になります。

一方、交渉コンペティションにおいては、生徒同士の活動が大切になります。確かに、作問は大人が行いますし、採点者も大人であるということは受験のための勉強と同じです。しかし、交渉という場においては、交渉の7つの指針を活用し、合意を形成することが大目的になります。採点者として関わる大人がどう思うか、ということよりも、目の前にいる同年代の対戦相手がどうやったら納得してくれるのかということを第一に考える必要があります。本校の生徒たちも、資料の作成などの事前準備や、相手に納得してもらうための作戦立案などには苦労していましたが、同年代が相手だったからこそ、合意形成を目指していっそう真剣に取り組んでいたのだと思います。

学校の勉強においては、テストの点数や評価・評定といった大人からの評価にどうしても目が行きがちになってしまいます。受験のための勉強となると、なおさらのことです。生徒たちが互いに工夫を凝らし対話を重ねていき、合意形成を目指すという交渉コンペティションは、主体的・対話的で深い学びを実現する場であり、生徒の学ぶ意欲を掻き立てる場であると感じています。

最後に、中・高等学校交渉コンペティションの企画・運営だけでなくご指導にご協力賜りました実行委員会の先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。